

三友量順先生を送る

溝 口 元

2016（平成28）年12月12日曜日、午後、立正大学熊谷キャンパスのバス停留所からアカデミックキューブまでの回廊に、数名の作業着姿の方々が慣れた手つきで次々に横断幕を張り出し始めた。そこには「2016 社会福祉学部20年」「2017 熊谷キャンパス50年」「2018 地球環境科学部20年」と記されていた。

1978（昭和53）年度、熊谷キャンパスに着任されて以来39年間、保育専門学校、短期大学部、そして、社会福祉学部、大学院社会福祉学研究科と全身全霊、渾身の力をこめて現在の形に構築された立役者の一人が本年度一杯で定年退職によりキャンパスを去られる三友量順先生である。そして、その働きぶりを感じしながら傍目でながめていたのが筆者であり、気付いてみると、今日、熊谷キャンパスでもっとも長く三友先生と在職期間をとものにさせて頂いた専任教員になっていた。それがこの一文を依頼された契機でもある。

周知のように、社会福祉学部の直接的な前身、ないし母体は、立正大学短期大学部社会福祉科、幼児教育科、それぞれ1部、2部である。しかし、前身には前身があるもので、その社会福祉科は夜間開講の短期大学部社会科、幼児教育科は定時制の保育専門学校がルーツと捉えられる。2016年11月13日、社会福祉学部創立20周年を祝うセレモニーが熊谷の「ホテルガーデンパレス」で行われた際、こうした時代の卒業生のお顔も数名拝見することができた。すなわち、三友先生は、社会福祉学部からみれば前身の前身時代から勤務されていたことになる。

さて、先生の詳細な履歴や燦然と輝く学問的業績の一覧については、先生ご自身がまとめられた記事に委ね、ここでは往時、三つ揃いのスーツで口にはパイプ、近年では仏頭のループタイ着用ととてもダンディないでたちでいらっしやっただ三友先生との思い出を3つほど述べさせて頂ければと思っている。

まず、三友先生の大学教員としての立ち位置のことである。1983（昭和58）年度に着任した筆者が熊谷キャンパスでの教員生活に慣れた80年代半ば頃、三友先生に「先生は、研究者ですか、教育者ですか、宗教者ですか」と尋ねたことがある。先生は、言下に「私は宗教者です」とお答えになった。大学の教員といえば一般には研究者を自認ないし志向し、義務として教育や経営にも求められた場合に関わるというところであろう。しかし、三友先生の中では日蓮宗の僧侶としてのご自身が優先順位の一位なのである。三友先生の行動の理解が容易なるポイントの一つのように思われた。一番の典型が計算上、単位不足となり卒業が困難になる可能性が高いと考えられる学生に対する可能な限りの対応の模索である。三友先生の「強く主張しない」「すべてを許す」「すべて認める」の精神は、徹底していると常に感じてきた。

一般に宗教の根底には「絶対的に信じる」、科学のそれは「徹底的に疑う」というモットーが横たわっている。三友先生は立正大学仏教学部、東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専修と最高学府で学問としての宗教を学ばれ身に付けられたとあって良いと思われる。一方、筆者は大学院時代、戦後ほどない初期のフルブライト留学経験者などからアメリカ流の研究スタイルと徹底的な西欧近代合理主義を身に着けた先生方から薫陶を受けた科学至上主義者である。となると、およそ三友先生と筆者とは「水と油」の関係になる。ところが熊谷キャンパスは不思議な力を有しており、水と油を一体化してしまう界面活性剤のように作用するのである。

三友先生から筆者は、宗教上の基礎知識を教えて頂いたばかりでなく、時間の長短はともかく、しばしば教育論、言語論、文化論、社会論、さらには世界のあり方などにまで話題が及ぶことがしばしばであった。大変ダイナミックでエキサイティングな体験をさせて頂けた。そして「こういう話こそ学生にも聞かせたいですよねえ」などと話したものである。現在、東京・池上の日蓮宗宗務院で開催される「ビハーラ研究会」に筆者が出席させて頂き、関心を同じくする日蓮宗の僧侶の方々と議論や懇親の機会を与えて頂いたのも三友先生の御蔭である。

さて、いまでも強烈な印象として記憶に残っているのが2006年夏、身延山日蓮聖人御草庵跡における三友先生のお経である。短期大学部時代は、設立当初から発展的解消まで、新入生キャンプはしだれ桜が見事な身延山で行っていた。「建学の精神」を体感するもっとも直接的で具体的な方法が身延山を訪れ一時を過ごすことであろう。社会福祉学部になってからは、学部として身延山へ赴くことはなくなってしまったが、三友先生はゼミの学生や大学院生を引率され、毎年、身延山を訪れていらした。この年は筆者が担当していた大学院生が身延山に興味を持ち、タイミングも合ったので三友先生がセッティングされた大学院生の合宿勉強会にご一緒させて頂いた。その夕食前の夕方、日蓮聖人御草庵跡で三友先生がお経を唱えられ始めたのである。力強く透き通るお声がまさに霊峰の空間と共鳴するひと時であった。なにものにも代えがたい、素晴らしい体験であった。

三友先生は、研究所長、大学院研究科長、学内学会会長の社会福祉学部アカデミズムポスト「三冠王」を達成された初の人物である。そのなかで、大学院博士後期課程設置については、三友研究科長の下、筆者は大学院常務委員として2006、2007年とともにその申請・設置業務を担当させて頂いた。およそ新設学部は博士号を取得し、国際的に通じる研究者を輩出して真の完成といえるものであろう。社会福祉学部にとって、その第一歩の仕事である。博士後期課程設置の開設にあたって大学設置審議会の審査が必要か届出だけでも認められるのか、連日、議論に議論を重ねた。あらゆるシミュレーションを強いられたが、結果は「届出」による設置認可となった。それにともない三友先生を先頭に、田澤あけみ、清水海隆教授らとともに大学学園から筆者もいわゆる学部初の「D[Ⓢ]」教員として認定されたのであった。

まさに走馬灯のように思い出が巡る。熊谷キャンパスから専任教員としての三友量順先生いうまさに智の巨星が熊谷キャンパスを去る。万感の思いを抱きながらご一緒させて頂いた34年間の学恩に報いることを今後の使命としたい。ご苦労さまでした。